



シギ・チドリ類調査 ニュースレター



2024年度冬期概要版

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査 2024年度冬期調査結果の概要

全国105ヶ所のサイトで実施

2024年度冬期調査は、2024年12月1日から2025年2月28日までの期間に実施されました。全国105ヶ所（暫定値）のサイトで調査を実施し、このうち一斉調査（2024年1月12日を基準日とした前後1週間の調査）には81サイトが参加しました。一斉調査期間では、シギ・チドリ類35種19,681羽のほか、ツクシガモ941羽、ヘラサギ15羽、クロツラヘラサギ121羽、ズグロカモ3,563羽が記録されました。冬期の全サイトの最大個体数（調査期間内に記録された各種個体数の最大値）の合計は、シギ・チドリ類40種36,880羽のほか、ツクシガモ5,408羽、ヘラサギ71羽、クロツラヘラサギ357羽、ズグロカモ7,370羽でした。

冬期の個体数は微増

1999年度冬期以降の「全サイト」と「継続サイト」（調査が継続されているサイト）のそれぞれの最大個体数の合計を、グラフに示しました（Fig.1）。全サイトの最大個体数の合計は、前年度と比べ333羽増加、継続サイトでは前年度と比べ279羽増加し（前年度比、全サイトで0.9%増、継続サイトで1.3%増）、全サイト・継続サイトともに、昨年に比べて微増していました。

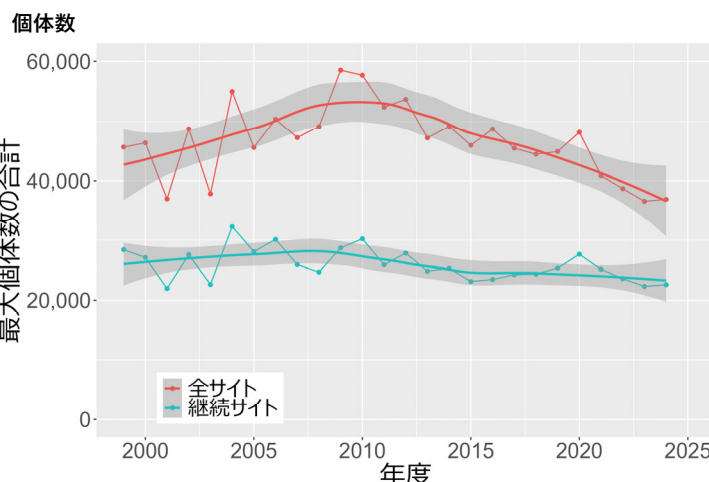


Fig.1. 冬期調査における全サイトと継続サイトの最大個体数合計の推移（1999年度から2024年度の継続サイトN=27）

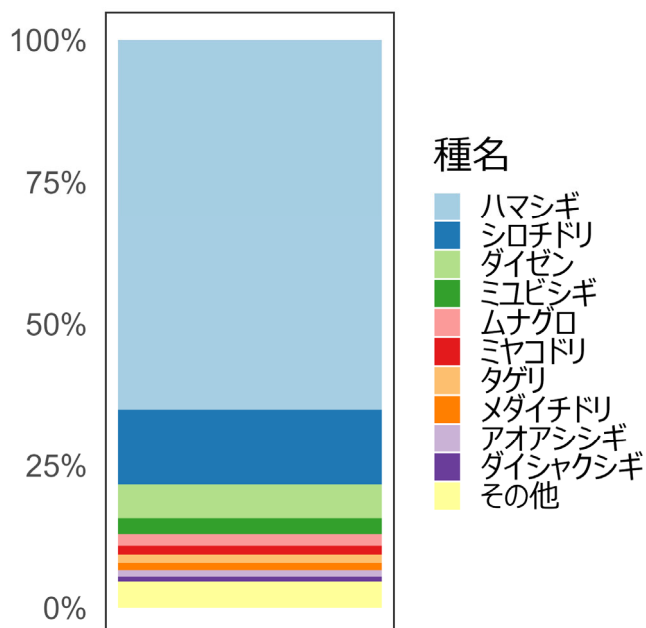


Fig.2. 2024年度冬期調査におけるシギ・チドリ類の種構成比

ハマシギ、シロチドリ、ダイゼンの順位は変わらず

2024年度冬期調査におけるシギ・チドリ類の種構成比をみると、個体数上位は、ハマシギ65.0%（23,977羽）、シロチドリ13.3%（4,914羽）、ダイゼン5.9%（2,187羽）でした（Fig.2）。ハマシギは、総個体数の過半数以上を占め1位、2位のシロチドリは昨年の1.5倍の個体数を記録しました。1位ハマシギ、2位シロチドリの順位は1999年以降変化がなく、10位までの順位は昨年冬期と同じでした（Fig.3）。長期的な順位の変動を見ると、アオアシシギの上昇傾向、メダイチドリ、ダイシャクシギの下降傾向は近年停滞していますが、ミヤコドリは引き続き上昇傾向にあります。

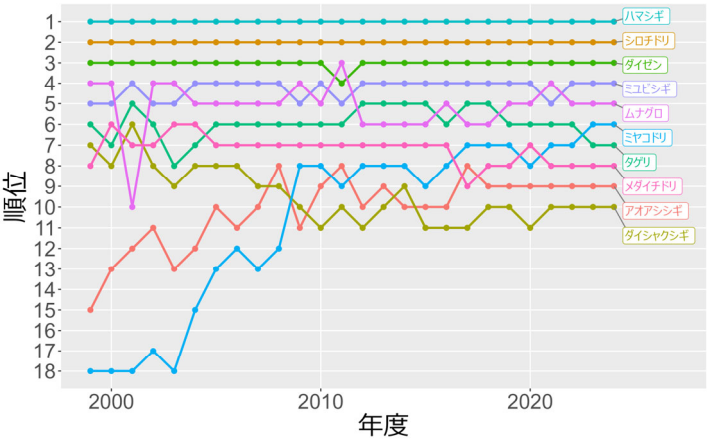


Table.1. 2024年度冬期 サイト別の最大個体数上位10サイトにおける前年度差、前年度比

サイト	最大個体数	前年差	前年比
大授搦（佐賀県）	8,362	412	1.05
白川河口（熊本県）	3,731	691	1.23
鹿島灘（茨城県）	2,175	2,171	543.75
中津干潟（大分県）	2,067	20	1.01
泡瀬干潟（沖縄県）	1,597	-84	0.95
不知火干潟（熊本県）	1,485	151	1.11
三番瀬（千葉県）	1,279	-633	0.67
氷川（熊本県）	1,257	-309	0.80
藤前干潟（愛知県）	1,207	263	1.28
盤洲（千葉県）	977	248	1.34

Fig.3. 2024年度冬期調査における最大個体数上位10種の順位の変化（1999年度から2024年度）

最大個体数の上位サイトは、前年度比増

冬期の最大個体数の上位10サイトでは（Table.1）、九州地域が6サイト含まれていました。大授搦（佐賀県）は、8,362羽と依然最大規模を誇り、前年より412羽増加していました。白川河口、不知火干潟（熊本県）、鹿島灘（茨城県）、中津干潟（大分県）、藤前干潟（愛知県）、盤洲（千葉県）も増加していました。鹿島灘は前年比約543倍と極端な増加を示していますが、前年度の調査時にシギ・チドリ類がほとんど確認されていなかったことによります。一方、泡瀬干潟（沖縄県）、三番瀬（千葉県）、氷川（熊本県）は減少しており、特に三番瀬は、30%以上減少していました。サイト別の増減傾向は、全国的に一律な傾向はなく、地域ごとに増減が見られました。

越冬種の分布変化は温暖化を表すか？

1999年から2024年の冬期に観察されたシギ・チドリ類 37種（ツクシガモ、ヘラサギ、クロツラヘラサギ、ズグロカモメを含む）のデータを使用して、観察されたサイトの「緯度・経度」に種ごとの冬期最大個体数を使用して重みづけし、各年の種の分布の重心を計算しました。これにより、冬期どこに分布の中心を持っているかを年次で把握しました（Fig.4）。その結果、ハジロコチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、アオアシギ、アカアシギ、コアオアシギ、トウネン、セイタカシギ、ズグロカモメは、年々冬期の分布重心が北上しており、逆にダイゼン、コチドリ、ハマシギ、ヨーロツパトウネン、ツクシガモは、南下傾向がありました。国内の平均気温も年々上昇しており、北上に関しては気候変動の影響がありそうですが、南下している種もあることから、それ以外の要因も検討していきたいと考えています。

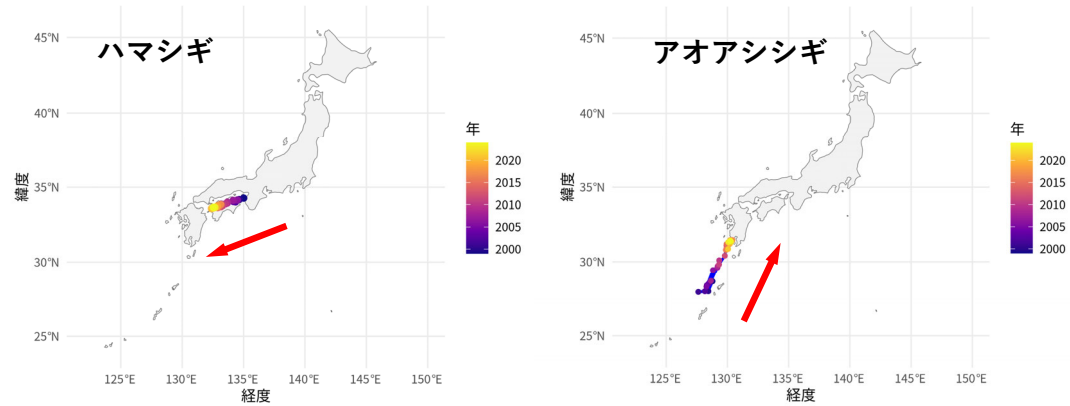


Fig.4. 1999年度から2024年度のハマシギ(左)とアオアシギ(右)の冬期分布重心の年次変化。
点は、分布の重心を表し、実際の分布とは異なる。濃い紫から黄色になるにつれて最近年を表す。

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:ハマシギ(三木敏史)
2024年度 冬期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <https://www.biodic.go.jp/moni1000/>
編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>
編集者 守屋年史 電話/Fax:042-505-4044 メール: shigichi@bird-research.jp